◎特別寄稿

大阪七墓巡り復活プロジェクトについて（前）

観光家／コモンズ・デザイナー／社会実験者　陸奥賢

蒲生墓地・六地蔵（写真提供：陸奥氏）

一、大阪七墓巡りとは？

かつて大阪には都市近郊の墓地を七ヵ所お参りして無縁仏を供養する「大阪七墓巡り」という風習があった。あまり詳しい史料などはなく、いつの時代から始まったのかよくわかっていないが、浄瑠璃作家の近松門左衛門が七墓巡りを盛り込んだ『賀古教信七墓廻』という作品を書いている。

『外題年鑑』によると「元禄十五年七月十五日上演」とあり、こうした記録から推察すると元禄（一六八八～一七〇四年）の頃には、すでに七墓巡りの風習は成立していて、芝居の演目になるぐらいには、当時の大阪の町衆のあいだでも一般認知されていたものと思われる。

七墓巡りは盂蘭盆会の頃に実施され、近松の『賀古教信七墓廻』が「旧暦七月十五日初演」なのも、そうした時期を意識してのことだろう。また初演時には地獄や賽の河原の情景などを人形で見せる趣向などもあったという。

『正本近松全集』の「解題」では「惨酷無惨で奇怪極まる幼稚な作品」と酷評されているが、いかにも子供騙しの趣向に感じられ、実際に当時の観客も微妙な反応だったようで、『賀古教信七墓廻』は一度だけの上演で、これ以降の再演の記録はないという。

梅田墓地跡・うめきた開発地区（写真提供：陸奥氏）

いろいろと謎めいた風習だが、七墓の所在地についても不明確な部分が多い。『賀古教信七墓廻』では第四段「夏野のまよひ子」の中に七墓が登場してくるが、その原文を抜粋すると「あだし煙の梅田の火屋」「短か夜を誰が慣わしの長柄川」「道のなき野原笹原葭原の」「泣き泣き歩む夏草の蒲生」「それとも知らで別れ行末は小橋の」「寺の鐘の聲高津墓所に夕立の」「煙知るべに千日の」「これぞ三途と一足に飛田の」と近松お得意の掛詞で調子よく次々と大阪の墓地が登場してくる。

しかし、よく読むと「①梅田」「②長柄」「③葭原」「④蒲生」「⑤小橋」「⑥高津」「⑦千日」「⑧飛田」と七墓巡りであるのに、なんと「八ヵ所の墓地」が紹介されている。

これは一体どうしたことかと他の文献を調べてみると、大正十五（一九二六）年発行の『今宮町誌』（編纂＝大阪府西成郡今宮町残務所）の「木津の墓」に七墓の場所が記されていた。それによると「木津の墓は古来大阪の七墓、即ち千日前、梅田、福島、天王寺、鴉田、東成郡榎並と同じく七墓の一に加へられた場所」とあった。

他にも昭和十（一九三五）年発行の『郷土研究　上方』（編者＝南木芳太郎）「上方探墓號」では、「その場所は時代によって多少の変遷があり、又振出の都合にて手近の墓所のみを巡った形跡もある。その場所を挙げると、北よりすれば梅田、南浜、葭原、蒲生、小橋、高津、千日、飛田辺りが古い時代のもので、明治になると長柄、岩崎、安部野辺りが加わっている、その他、安治川、大仁、野江等の三昧も七墓巡りの中に入れねば成るまい。もっと小さな墓所も場末にはあったであろう」とあった。

整理すると『賀古教信七墓廻』の八ヵ所以外

陸奥賢（むつ・さとし）

観光家／コモンズ・デザイナー／社会実験者。一九七八年大阪・住吉生まれ、堺育ち。最終学歴は中卒。二〇〇七年に堺のコミュニティ・ツーリズム企画で地域活性化ビジネスプラン「SAKAI賞」を受賞（主催・堺商工会議所）。二〇〇八年から二〇一三年まで「大阪あそ歩」（二〇一二年、観光庁長官表彰受賞）プロデューサー。二〇一一年から「大阪七墓巡り復活プロジェクト」「まわしよみ新聞」（読売教育賞受賞）「直観讀みブックマーカー」「当事者研究スゴロク」「歌垣風呂」「死生観光トランプ」などのコモンズ・デザイン・プロジェクトを手掛ける。大阪まち歩き大学学長。著書に『まわしよみ新聞をつくろう』（創元社）。